



『ROAD TO 2020～組織委員会／スポーツマネジャーからのメッセージ～』

「国際フェンシング連盟の委員会活動」

国際フェンシング連盟（FIE）には、理事会の他に5つの大陸連盟と、14の委員会があります。

FIEの定款では、常設の委員会（審判、アスリート、SEMI、法律等）を「Commission」と呼び、必要性に応じて設立される専門的な委員会（フェアプレー、コーチ、ベテラン、女性等）を「Council」と定義づけています。

FIEの理事会・委員会のメンバーは、オリンピック開催年のFIE総会で、選挙や理事会からの指名によって決められます。そして、委員会によって会議をする回数は異なりますが、年に1度は、全委員会が集まることが慣例になっています。

先月、全委員会のメンバーがルーマニア・ブカレストのホテルに集まり、それぞれの委員会で会議を行いました。全委員会が会議室を隣り合わせにして行うことにはメリットがあります。例えば、複数の委員会にまたがる課題があった場合に、委員会同士で協議し合うことを可能にします。

私は2016年末から2020年末までの4年という任期で、「Women and Fencing Council」という委員会に所属し、先述のブカレストで開催された会議にも参加してきました。会議での議論は主に2つありました。

まずひとつは、この委員会の名称変更です。「Women」という言葉を使用しない方向性が議論・検討されました。

今は、1人の人間の属性を、性別・国籍・国民性だけでシンプルに区分けすることはできない時代です。例えば性別でいうと、当初の考え方は男性と女性というような2分割でしかありませんでしたが、いまは決して2種類だけでは分けられません。このような複雑性に、スポーツ界においても取り組み始めたという背景を受けての議論でした。

次に、今年12月に開催されるFIE総会への提案についてです。

3年前のFIE総会では、FIE理事会メンバーの女性比率を30%とすることが可決されましたが、同じくFIE委員会メンバーにも30%の比率を設ける法案については可決されませんでした。来る総会で改めて審議されることになっています。

今の段階で女性比率が30%を超えている委員会もあるため、「すでに門戸は開かれている。女性比率を上げる規程を作る必要はない。」という意見や、「女性に男性同様に能力があれば、あるいは、男性と同等の努力をすればいいだけのこと」「男性と女性には生物的違いがあり、それぞれの委員会活動には男女による向き不向きがある」といった意見も聞きました。歴史やこれまでの慣例を振り返ると、このような考え方が生まれるのはやむを得なかったと思います。

この法案について、皆さんはどう思われるでしょうか。多くの方々の意見を伺って、私自身が答えを出せずにいたのですが、今は必要と感じています。なぜなら自分自身が同じような恩恵を受けたからです。私が過去に日本フェンシング協会の理事を仰せつかったとき、私は通常の選挙によって当選したのではなく、理事会推薦によって総会に承認され、任命を受けることができました。任命された当時、長年従事されてきた理事の皆さまを前にして、私に同等の実力や経験を備えているとは到底思えませんでした。そのときの日本フェンシング協会が、タイミングよく新しい風を必要としてくださったこと、さらに女性比率を意識してくださったことで、幸運にも任命してくださったものと捉えています。

FIE委員会メンバーの女性比率30%は、当然存在しないことが理想ではありますが、いまはまだ必要としている委員会があり、本来のプロセスでは当選困難であろう新規の立候補者の背中を、一押ししてくれることとなります。

さて、「Women and Fencing Council」は、こういった法案に対する取り組み以外に、どのような活動をして、どのような成果を出しているのでしょうか。実は、この委員会だけで取り組んでいることや、この委員会そのものが創り出す成果は多くありません。なぜなら、ほとんどの活動はFIE本体や他の委員会と連携して取り組んでいるからです。この委員会は、他の委員会メンバーが、フェンシング界で起こりうる弱者犠牲・蔑視・不平等の撲滅を、各々の委員会の方針や活動の中で心がけてもらえるように促す部隊です。

FIEの各委員会で、それぞれ抱える犠牲者の小さな声を拾うことができ、そして組織的に守れるようになったとき、この委員会の目標は達成され、発展的に解消することができます。それこそが、目に見せることができる成果であり、永遠には続かない「Council」といわれる所以となっています。

さて、とうとうオリンピック開催まで2年を切りました。オリンピック開催時には、世界が日本のフェンシング界に注目します。私は、幕張会場で繰り上げられるスポーツプレゼンテーション（演出用照明等）によるものではなく、表には出にくいところで地道に取り組んできた方々による笑顔で、幕張会場を埋めることができればと思います。そのほうが、2年後の会場だけでなく、その先のフェンシング会場でも、日本フェンシング界をキラキラと輝かせてくれると思うからです。